

空をあおぐ人

狐野 秀存

一 昨年暮れに、山田洋次監督の「十五才」という映画が封切られました。昨年暮れには、テレビでも放映されたようですからご覧になった方もあると思います。山田洋次監督は「フーテンの寅さん」シリーズの映画の後半の頃から、学校をテーマにした映画を撮ってこられました。その四作目です。主人公は大介君という横浜郊外のサラリーマン家庭の男の子です。中学校二年生の途中から学校に行けなくなってしまいました。不登校です。朝、起きるとお腹がいたくなって休むことが続いてしまう。家の人は最初は心配するんですが、二日や三日ならいざ知らず、それが一ヶ月、二ヶ月と続いて、やがて半年近くになると、特にお父さんは「お前なんか、だめだ。意気地がないから学校に行けないんだ」と頭から叱り飛ばしてしまいます。本人も別に学校を

さぼりたくて行かないんじゃない。学校に行きたいと思うんだけど、体が言うことを聞いてくれないわけです。

そういう大介君がある時ふと、屋久島に行つて屋久杉を見ようと思いたつんです。屋久島は鹿児島県の南にありまして、神代杉とか縄文杉といって、樹齢何千年、五千年、七千年という古木が群生しています。そういう悠々とした時を生きてきた杉の木に触れれば、元気が出るんじゃないかと思うんです。でもそんなことをお父さん、お母さんに言うわけにいきません。学校に行つていないのですから。「僕、屋久島に行つてくる」なんて言つても、「お前、何を呑気なことを言ってるんだ」と叱られるのに決まっています。それで、ヒッチハイクで行くわけです。高速道路のパーキングエリアで西の方に向かうトラックに乗ってもらつて、西へ西へ向かつていけばいいんだと。映画では、その途中の道中のエピソードがいくつもあります。赤井英和さんが扮するトラックに乗せてもらいます。麻実れいさんの女性ドライバーのトラックにも乗せてもらいました。そうして、どうにかこうにか屋久島にたどり着きます。

ところがいざ、屋久杉を見ようと思つたら、山の上にあるんですね。二千メートル

空をあおぐ人

近い山の上に植わっている。がっかりするわけです。屋久島に行ったらすぐ見られると思っていたら、登山をしないといけないわけです。どうしようかなと思っていたら、そこに東京からやってきた真知子さんという二十代の女性が声をかけて、「私が一緒に登ってあげるから」と言う。真知子さんと二人で山を登り始めるわけです。高い山ですから途中でへこたれてしまう。「お姉さん、僕だめだよ」と弱音を吐く。その都度、「何言ってるの、君は若いのだからもつと頑張りなさい」と真知子さんに叱られ、叱られしながら山の上まで登って、樹齢数千年の縄文杉を見ることができました。

大感激です。「ヤッター」と躍り上がって喜ぶ。おそらく初めてなんだと思います。自分のしたいと思ったことをやり遂げた。そういう経験をしたのは初めてだったんでしょう。皆さんもそうかも知れませんが、今は幼稚園に入る頃から、小学校、中学校と、「これをしたいな」と思うより先に、お父さん、お母さんの方から「あなたは年長さんになったからこれをしなさい」「ピアノを習ったらどう」「サッカーのスポーツクラブに入ったら」と、いろいろ言われるままやってくるけど、いつも人から着せられた着物を着ているような感じですね。中学校二年生という思春期に差しかかって、

ふと自分というものを考える。「今ここにこうして泣いたり、笑ったりしているのは私自身なんだけど、私は誰なんだろう」ということがわからなくなってきたのかもしれません。大介君もそういうことがだんだん積み重なって学校に行けなくなったのかもしれないかもしれません。それが初めて、無茶かもしれないけれど、屋久島に行つて屋久杉をみようと思いたつて、途中大変なこともあったけれど、やり遂げた。「やったー！」と小躍りして喜んでいきます。

その日は山小屋で一泊しなければなりません。一緒に登つてくれた真知子さんと山小屋で枕を並べて寝物語をします。思わず知らず、真知子さんに大介君は愚痴を言うんですね。「僕は実は学校に行つてないんだ。勉強もあまりできないし。妹の方が勉強がよくてできる。家の人からも妹と比べられてガミガミ言われる。おまけに顔中、ニキビだらけだし、女の子にもてない。どうせ僕なんかつまらない」と言っちゃうんですね。そうすると真知子さんは「そんなことないよ。君は素敵な十五才じゃないの」と言います。一呼吸おいて大介君が真知子さんに問い掛けます。「ぼく、あれからずっと考えてたんだけど、一人前つてどういふことですか?」。十五才、思春期にさし

空をあおぐ人

かかった少年の思いを込めた問いです。そして真知子さんが「そうだね。まず君はありのままの自分を好きにならなきゃ。一人前になるっていうのは、そこから始まるんじゃないのかな」と答えます。

映画はその後、山を下りた大介君のもう一つのエピソードがあります。そこで人がいろんな人と家族を持つたり、友だちを持つたりして生きていることを知ります。やがて心の中に何かしつかりしたものが根を下ろします。そして家に帰って、もう三年生になっていましたが、もう一度学校に行き始めるというストーリーの映画でした。

映画を見終わって、「ありのままの自分を好きになる」というセリフはいいなと思いました。そして同時に「ありのままの自分を好きになる。これはひよっとしたら難しいことかもしれない」と思い返しました。十五才の大介君にとって、勉強はできないし、顔中ニキビだらけだし、どうしていいかわからない、落ちこぼれのような自分、そのありのままの自分を好きになる、大きな宿題です。だけれども、ありのままの自分を好きになるということは、たとえばここにいる青春真っ只中の皆さん方にとっても、それから私のようにそろそろ人生の先が見えたかなという中年男にとって

も、ひよつとすると、七十、八十の、人生のさまざまなことを経験して、豊かな知恵を持っておられる老人にとつても、ありのままの自分を好きになるということは、大変難しいことではないかなと思います。今日はそのことを念頭におきながら話をしたいと思います。

「草にすわる」という詩があります。

わたしの まちがいだつた

わたしのまちがいだつた

こうして 草にすわれば それがわかる

これは八木重吉という人の詩です。八木重吉は今から七十年以上も前に亡くなられた方ですが、神奈川県に生まれ、高等師範学校を出て、兵庫県と千葉県で英語の先生をしておられました。熱心なクリスチャンであります。生前に『秋の瞳』という詩集を出されましたが、若くして結核になって死んでいかれます。桃子ちゃんというお嬢さんと、陽二君という息子さんの二人の幼い子どもを残して亡くなられたんです。妻

空をあおぐ人

のとみ子さんは残された二人の子どもを育てて、頑張つてこられるんですが、その八木重吉の遺児である桃子ちゃん、陽二君も十代で病で死んでしまいました。とみ子さんは、たまたま歌人の吉野秀雄という人のご家庭でお手伝いをするようになるのですが、戦後、吉野秀雄さんと再婚されます。それまで草野心平さんなどが八木重吉のことを思い起こして、詩集をだしてくれていますが、多くの人々の記憶からは忘れ去られた人でした。それが、とみ子さんが再婚した吉野秀雄さんと、吉野さんの先妻のお子さんたちが協力して、『八木重吉詩集』が編まれます。それからだんだんと一般の私たちの目にも止まるようになってきました。私は若い頃から八木重吉の「草にすわる」という詩が大好きで、失敗したり、心に屈託がある時はこの詩を呟きながら自分で慰めていたようなことです。

わたしの まちが良かった

わたしのまちが良かった

こうして 草にすわれれば それがわかる

「私は正しくて、お前が間違っている」と思うから衝突するし、口喧嘩にもなる。

この詩を口ずさむと「ひよっとするとこちらの方が間違ったかな」と少し自分自身を振り返れるような気がします。草に座るといことが大事なことだと思います。現代は草原もなくなりましたが、ゆっくりと草原に座って空の雲を眺めるとか、そういう余裕がなくなっていました。

実はこの八木重吉の「草にすわる」という詩を改めて思い起こすことになったきっかけがあります。二年前の二〇〇〇年一月一日付の朝日新聞が「新世紀を語る」という連載記事の特集しました。その第一回目に、アメリカのコロンビア大学のエドワード・サイードという人のインタビュー記事載せていました。その中で、サイード教授がこういうことをおっしゃっています。

民族や文化が混ざり合う中で、自分は誰なのかという自画像が揺らいでいる。

今はインターネットですから、情報が瞬く間に、地球全体を駆けめぐっています。アメリカで、ヨーロッパで、アフリカで、地球上のどこであつても、今、起こったことがリアルタイムで今日のニュースに放送されます。今から何十年前とは、十年前でもずいぶん違うと思います。考えられなかったこと、グローバルな時代、地球全体が

空をあおぐ人

一つの共同体になってしまおうような、そういう時代に入っております。けれども、逆にそうしたことが、人と人が出会い、互いがわかりあうということにつながる。むしろ処理できないほどの情報量の洪水の中で、人と人が顔を合わせ、声をかけあうことがなかなかできづらくなっているという逆説があります。文化や民族が交通、情報が発達によつてつぼのように交差しているんだけど、そういう中でふと気がつく、自分というものが一体誰なのか、わけがわからなくなってしまう。いろんなことを知っており、いろんな豊かなものに囲まれているのだけれど、肝心の私というものが、本当に何をしたいのか、何者になろうとしているのか。私の一生を尽くして、自分の命というものがいったどこに向かっているのか。私がかがわたりづらくなっているということ、サイド教授は社会学の先生ですから、鋭く指摘しているわけです。

私どもの真宗大谷派に和田稠（わだ・しげし）という先生がいらっしやいます。その和田先生がこういうことをおっしゃっているのです。

今までにも親鸞聖人は何遍も訪れてくださいましたけれども、現在再び、三度、

親鸞聖人が訪れてくださらなければならぬ危機的な崩壊現象の時代に来ているわけです。(『南御堂』新聞、一九九九年六月号)

親鸞聖人は今から七百四十年前に亡くなった人ですが、その親鸞聖人という名前、そして親鸞聖人の名のもとにたくさんの人たちが伝えてくださった教えは今現在も生きていくわけです。この京都光華女子大学は親鸞聖人という名のもとに建てられた学校です。もし親鸞聖人という人が全く歴史の中で忘れ去られてしまったならば、痕跡さえもなくなってしまうならば、皆さん方は今、ここにいないわけです。ずいぶん昔の人だけど、多くの人が親鸞聖人の名前を呼んできたから、そういう縁で皆さん方もここにいくわけです。そして親鸞聖人は危機的な崩壊現象の時代に直面している今日こそ、我々の前にもう一度、三たび現れてくださるに違いない。あらゆるものが当てにならなくなってしまうた、先行き不透明、この先どうなるかわからなくなってしまうている、そういう危機的な時代にこそ、親鸞聖人の名は呼ばれるべきなのだ和田先生がおっしゃっておられる。この二つのことが八木重吉の「草にすわる」という詩を思い起こすきっかけになりました。

空をあおぐ人

今から五十年ほど前のことですが、第二次世界大戦が終わった直後の一九四六年、マックス・ピカートという人が一冊の書物を書きました。「われわれ自身のなかのヒトラー」と題するものです。アドルフ・ヒトラーがヨーロッパ及びソビエト・ロシア、イギリス等も巻き込むような戦争を引き起して、ヨーロッパの人たちは塗炭の苦しみを味わってきたんですね。そしてユダヤ人をはじめ、ロマと呼ばれる人たち、差別されてきた人たちが強制収容所に移送され、何百万人という人がガス室で抹殺されていた。それが一九四五年になって、ナチス・ドイツは崩壊しました。ヒトラーは自殺をいたします。長い間、自分たちの上を覆っていたヒトラーの暴虐がやっと終わったということ、ヨーロッパの人たちは「これで戦争はもうないのだ。もうヒトラーはいなくなった」と大喜びをしている時に、ピカートは「われわれ自身のなかのヒトラー」という本の中で、確かにアドルフ・ヒトラーは大変な暴虐をしたが、あのヒトラーはアドルフ・ヒトラー個人の問題ではないということ述べたわけです。ヒトラーをしてこの時代に生まれさせたもの、ヒトラー的なものと呼び出した時代の問題があるのだということを警告いたしました。ピカートはその中で四つの喪失というこ

とを言っています。

一つは「基準の喪失」です。毎日の生活で皆さんも基準があるでしょう。今日はこのことをしようとか、今度はこういうものになっていこうという。そういう基準がなかったら、行き当たりばったりになってしまう。その時、その時の自分の気分や感情で、昨日は右、今日は左、明日はどこの方に行くのやら、ふらふらしてしまう。それでは自分の生きる人生が何をしているかわからなくなってしまう。そういう意味で、我々は必ず自分の中に基準を持って生きていくわけなのですが、その一人ひとりの基準と同時に、どんな人もそれに従わなければならない基準があります。普遍的な基準というものがなければ、人間社会というものが成立しません。銘々が自分だけの基準を持ち出したらわがままというものですね。男性なら腕力が強いものが基準だと何らかの形で自分の基準を正しいとして、皆をそれに従わせる。支配と被支配の形になってしまいます。そんなものはまた時間がたつと、別のもっとすばらしい人、もっと力の強い人が出てきてひっくり返る。当てにならないわけです。どんな人も、力があるうとなかろうと、能力があってもなくても、すばらしくても、つまらなくても、人で

空をあおぐ人

ある限りは、皆「たしかにそうだね」と頷うなずかなければならない道理。それがここで言う基準です。マックス・ピカートは今日の最も危機的な問題は、その人みなそれぞれに依るべき基準がわからなくなってしまうことだというわけです。

マックス・ピカートはこう言います。基準が見当たらなくなってしまうからヒトラーが出てきた。ヒトラーは大きな声を出して、人々を惹きつけるような演技をするわけです。昔のニュース映画であります、ヒトラーは夕暮れ時に広場にたくさんの群衆を集めて演説します。あたりはだんだん暗くなってきます。四方からサーチライトを照らすんです。それだけで人々は一種の興奮状態になる。演出効果満点のところヒトラーが登壇します。彼はそんなに難しいことは言わない。「我々ドイツ国民は優秀である。だから我々ドイツ国民が他の民族から不当に扱われるのは間違っている。その優等なるドイツ国家の中に我々自身の優秀さをかき乱す不穏な分子がいる。それがユダヤだ」と。普通聞いたら、そんな粗雑な根も葉もない話は「何を変なことを言っているのだろうか」と思うんだけど、一つの時代の雰囲気、しかも群集心理をかきたてるような演出の中で、ヒトラーが弁舌逞たくましく呼びかけると、皆、そう思い込んで

しまう。「ハイル、ヒトラー」と言うんですよ。基準がなくなっているから後は大きな声で、人々の眼差しをどれだけ惹きつけるかという演技力の問題になる。中身は問わない。だからドイツ国民はヒトラーを歓呼の声をもって迎えたんでしょう。これが一つ目の基準の喪失です。

二つ目は、そのことから当然出てくる問題です。「他者の喪失」です。基準の喪失によって、私もあなたも彼も彼女も、このことに従っていかうというものがなくなるから、後は自分の気持ち、自分の感じしかないものですから、隣に人がいることがわからなくなってしまう。「私のフィーリングにぴったりする人なら友だちだわ」と思う。だけれども私の気持ちや私の感情に合わない人、反対意見を言う人に出くわすと、「昨日の友だちも今日は絶交よ」となってしまふ。自分以外の人は私にとって心地よい人なんです。利用できる人なんです。便利な人なんです。そういう人だけしか見ることができない。私の気持ちに合っても合わなくても、耳の痛いことを言ってくるかもしれないけれど、人をその人自身として真っ直ぐに見つめることができなくなってしまう。そういうことが他者の喪失です。

空をあおぐ人

三つ目が「言葉の喪失」。今日、言葉というものの信用はがた落ちです。「学校の先生だからそういうことを言っている」と言うわけです。その人の存在から生まれる言葉というものを聞くことができない。生きていることと、その人の語る言葉がバラバラになってしまっている。言葉も一種の演技になっている。言葉によって自分の気持ちを、自分が大切にしていることを人に伝えるということ、時には自分の存在そのものを相手に伝えていくことができなくなっています。今日、情報ということが飛び交っています。先ほど学長先生と一緒に三帰依文を唱和しました。この意味をゆつくりと皆さんの中で熟成してほしいと思います。「仏・法・僧の三宝に帰依します。そのことを私の基準とします」という大事な内容を持った言葉です。今日の我々にとっては三帰依文を唱和することと、カラオケボックスで歌を歌うことが同じレベルのことになってしまっている。むしろカラオケボックスで歌を歌ったり、週刊誌の記事を読む方が楽しい。情報言語と自覚言語の区別が立ちにくい。言葉は人が生きることの道理を表しているのだということをお忘れてしまっているということです。

そして四つ目。そうした基準や他者や言葉が喪失してしまうことは、「歴史を喪失」

してしまうことなのだということです。未来、希望がない。自分はこういうものになっていきたい。叶うか、叶わないかわからないけど、こういうことを実現したいなという夢を持つ、未来に対して希望を持つことができない。今さえよければいい、今さえ楽しければいい、面倒なことはどうでもいいんだとなってしまっているのではないか。ピカートは五十年前にそうした四つの喪失のことを言っているのですが、今日の私ももまさしく基準を喪失し、他者を喪失し、言葉を喪失し、そして歴史を喪失している。つまり「人間が断片化」してしまったのです。私というものはこういう姿形で、この身一つなんです。だけでも、その自分というものがばらばらになってしまっている。こちらの方ではその人向けの顔をする。別のところに行ったら別向きの言葉を使う。器用に自分自身を使い分けてしまう。

私どもに縁のある高史明さんという作家の方がおられます。その高先生が真宗、念仏の教えに縁を持たれたのは、もともとはお父さんが朝鮮で念仏を申しておられたという土壌はあるのですが、直接的には、真史君という十二歳になる息子さんが自殺されました。そのことを苦悩の中で受け止められたことがきっかけです。『ぼくは12歳』

空をあおぐ人

という題で真史君が残っていた詩や作文が公刊されています。その中で高史明先生が、息子さんの死後、ノートを開いて胸を衝かれた一つの短い詩があります。

人間ってみんな百面相だ

私は大谷専修学院を卒業してしばらく職員をやった後、思うところがあって、実社会に出て働かないとだめだと思つて三年ばかり仕事をしました。主に営業畑でお客さんに注文をもらう仕事でした。優秀な営業マンはどれだけたくさん顔をつくることができるかということです。お客さん一人ひとりに合わせてコロコロ自分の仮面を変えていく。十面相、二十面相、百面相とたくさん仮面を持っている人が優秀な営業マンです。逆に不器用で自分の生地顔しか見せられない人は、営業マンとしては成績は上がらないから会社から「君、転職を考えたかどうか」と言われる。現代という時代はかけがえないこの私を大事にしていくことをなかなか許してくれません。どれだけスピーディーにその多様性を身につけるかということが評価の大きな要素になっています。たくさんさんの人格を使い分けることのできる人間が優秀だと分類される。だから時々、街角で酔っぱらっているサラリーマンを見たらあまり眉をひそめないで

ください。彼ら自身、困っているんです。たくさん顔を使い分けているうちに、ど
れが自分の顔だかわからなくなってしまふ。一仕事終わった後、居酒屋さんで一杯、
キューツと飲んだ後、ハーツとため息をつけて自分を取り戻しているという状況なん
です。そういう大変な時代です。そういう中で、我々が、自分が自分自身であるとい
うこと、それはとても困難なことだけど、しかし自分が誰であるかわからなくなつて
しまつたら、本当に生きていくことができなくなります。どうしたら自分が自分自身
であることを確かめることができるのか。どこに自分自身を生きる道があるのか。真
史君の痛切な言葉は、現代という時代を生きる我々皆に投げかけられた大きな問いか
け、課題だと思います。

仏教に「大地に依って倒れ、大地に依って立つ」という言葉があります。今から二
百年ほどの前の人が書いた言葉です。東本願寺の円乗院宣明という人が言われた言葉
です。江戸時代の終期、十八世紀から十九世紀になろうとするころの本を読んでい
て出会った言葉です。これを見てびっくりしました。「ああそうだったのか」と思いまし

空をあおぐ人

た。私はものごころついてから、ずっと「倒れちゃいけない」と思っていました。躓いたり、立ち止まったり、倒れてしまうのはみっともないことだ。皆から遅れてうろうろするのはみっともないとずっと思っていました。自尊心ですね。実際に駆けっこをするとなんかに速くなかった。どちらかというと後ろの方でした。ただ勉強は少しできました。そこで辛うじて自分の自尊心を癒していました。中学校、高校に入ると自分よりもっと出来る人がたくさんいました。今までしがみついていた自尊心、プライドも木端微塵になりました。それでも「倒れちゃいけない、負けちゃいけない」と思っていました。紆余曲折があつてお坊さんの学校に行きました。今度はお坊さんの学校の中で、皆から注目されるようなひとかどのものにならないといけないと思つてずっとやってきました。仏教、お釈迦様の教えさえ、自分の自尊心を満たすために利用しようとしたんです。そういうことが身についていた。でも現実にはそんなにすばらしいものではない。時々、大きな失敗をして皆に迷惑をかけ、先輩からこつびどく怒られる。そのたびに面白くなかったです。自分の自尊心が満たされない。

それが今から二百年前の江戸時代に書かれた言葉を読んで、ひっぱたかれた気がし

ました。「大地に依って倒れ、大地に依って立つ」。言われてみたらあまりにもあたりまえのことですね。地面があるから倒れることができるんです。大地というもの、地面がなかったらひっくり返るわけにもいかないわけです。確かに躓いて、途中で立ち止まってしまったらみつともないし、皆から冷やかな目で見られる。そうなんだけれども、この地面があるから、大地があるから、どんなぶざまな私であつても、どんなみつともない私であつても、そのぶざまな私をぶざまのままに、みつともないままに受け止める大地があるから、倒れることができます。「まいったな」と思う。「恥ずかしいな」と思うんだけど、でもまた少し時がたてば気を取り直して、大地があるからもう一度起ち上がることができる。一周、遅れてしまったかもしれないけれど、とにかく一歩足を前に踏み出すことができる。「大地に依って倒れ、大地に依って立つ」。あまりにもあたりまえのことで、恥ずかしいことですが、五十歳を過ぎるまで忘れていました。この言葉に出会って感動しました。「地面があつたんだな」と思いました。

そして仏教ではこの地面、大地のことを大切なものとして教えています。二つのこ

空をあおぐ人

とがあります。一つは「永遠に母なるもの」です。比喩的なことがらですが、今は冬で、やがて三月、四月になると、地面からびっくりするほどの雑草が伸びてきます。

命を生み、育てる。そういう大地性、永遠に母なるもの、それを「大地」という言葉が象徴いたします。もう一つは、それと同じことですが「平等性」です。大地、地面はどんなものをも受け止めるわけです。その上に受ける。「あんたはいいけど、あんたは気に食わないから上にのせてあげないよ」ということはない。善きものも悪しき者も、優れた者も劣る者も、どんな者でもそのままに載せることができる。そういう永遠に母なる大地、平等な大地の象徴性をもって、仏教では「菩薩」という、仏道を修行する人の心を「地面」で表します。

実は、仏教というのは単純に言ってしまうと、大地の教えなんです。「地面があるよ」ということを教えているのが仏教というものです。さきほど、八木重吉の「草にすわる」という詩を紹介しましたが、あの「草にすわる」ということは、この大地から萌え出る草に託して、「大地、地面があるんだよ」ということを静かに語っています。八木重吉はクリスチャンですが、それと同じことがらがお釈迦様の『伝記』に出

てきます。

お釈迦様はインドで今から二千五百ほど前に生まれました。小さな国の王子様でした。だけれども二十九歳の時に「人は何のために、何をよりどころとして生きるのか」という問いを持って出家をされました。六年の間、苦行という激しい修行をされますが、自分の身を傷めたり、ただいたずらに厳しいだけの修行をすることは悟りに至る道ではないと思いい知られて、尼連禪河という川に入って、まず疲れた体を癒されます。やがて川から出て悟りを開くべく大きな樹の下に向かって歩みだすのですが、その時にインドの神様で帝釈天という神様が、いよいよお釈迦様がこれから悟りを開かれるということが神様だからわかるんですね。それで吉祥童子という少年の姿に身を変えて、そこにあつた草を刈ってくる。お釈迦様に「どうかこの草の上にお座りになってください」と言います。お釈迦様はその草を受け取られて、その上にゆつくり座って悟りを開かれたということが仏伝にあります。お釈迦様は草に象徴される大地にしっかりと身を据えて、いわば大地を全身で感覚して、やがて悟りを開かれた。お釈迦様の悟りの場を「金剛座」と申します。金剛というのはダイヤモンドのことで

空をあおぐ人

すね。ダイヤモンドに託してお釈迦様の悟りが壊れない、決して揺るがない、確かなものだということを象徴します。もう一つはダイヤモンドの輝く光に託して「無漏」と言います。「漏」は我々人間の自分勝手な思い、煩惱を象徴します。つまり、「無漏」とは、自分中心の思いという煩惱の囚われから解放されることを象徴します。

お釈迦様は金剛座という大地の上にしっかりと身を据えて悟りを開かれました。お釈迦様個人についてだけなら、それで悟りを開こうという目的を達したわけですからそこで終わるのですが、実は仏教はここから始まるんです。お釈迦様が悟りを開いて自分の悟った法を、命の法則なんだ、永遠に変わることのない真実なんだと、喜んでおられました。そこへ梵天というインドの神様がやってきます。「あなたが悟られた法をどうか心悩む人々のために説いてください」とお願いします。最初、お釈迦様は断られるんです。「私の悟った法は非常に微妙な事柄だから人々に説いても多分理解してもらえないだろう」と断る。また梵天が頼みます。お釈迦様はまた断られます。三度、梵天は「衆生を哀れむ心をもってお説きください」と勧めます。三度目の請いを受けてお釈迦様は「わかりました。人々に私の悟った法を説きましょう。理解して

くれる人もいるかもしれないし、誤解する人もいるかもしれない。しかし耳ある人、聞くことができる人はきつといるでしょう」と、その悟りの座から立ち上がって、以来、八十歳で亡くなられるまで四十数年間、伝道の旅にご自分の生涯を尽くされます。そういうことがお釈迦様の一生を記した仏伝の中に出てきます。

ここに二つの生命感覺のことが述べられています。一つはお釈迦様が悟りを開かれた。その金剛座という名前が象徴していますように、自分に与えられた命を無上に尊い、ダイヤモンドのようなすばらしいものとしてしっかりと感じる「自利」ということです。本当に自分を大切にすることです。もう一つは梵天が「どうか人々にあなたの悟った法を説いてください」とお願いしたのに応じて、その悟りの中から立ち上がった、縁のあるたくさんの人たちに生涯を命終わるまで佛法を説く旅に費やした。それは自分と共にいる人々を見捨てない。言っても誤解されるかもしれない。誰も聞いてくれないかもしれないが、共にいる人々を見捨てない。「利他」の心をもって生涯、説法の旅に出られます。そういう「自利」と「利他」の二つの生命感覺が象徴的に語られています。

空をあおぐ人

仏教がその始めに持っている生命感覚というものを、仏教の独特の言葉づかいですが、「功德」と言います。もともとは優れた性質ということですが。真宗のお勤めの最後に必ず「願以此功德」と言うので、聞いたことはあると思いますが、よく知っているわりには、わかりにくい言葉です。それで少し回り道をして考えたいと思います。

ギリシアの言葉で、日本語で「徳」と訳される「アレテー」という言葉があります。馬はバカバカと走るのが馬の徳なんです。小鳥は大空に舞い上がってチチチチと囀るのが鳥の徳です。魚は水の中でスイスイと泳ぐのが魚の徳です。そのように生き物にはそれぞれの徳があります。それでは人間の徳は何か。肝心要の人間の徳は何かとなりますと、わかっているようでわからない。昔から古今東西いろんな人が考えてきました。言葉を話す、人間の大きなしるしです。火を使うこと。火というのは道具を象徴しています。人間は火を起こしたり消したりするように道具をつくることができます。人間はその道具を加工したり改良して道具を操作をする。火を使うことが人間の徳の一つかもしれません。そして何よりも大きいことは社会を形成するということでしょうね。人間は、こうした大学とか教室、あるいは皆さんの家庭、町内、そういう

人と人とのつながりをつくっていく。社会をつくる。これが大きな人間の特徴、しるしだと思います。そうした事柄を一応総括的にとりまとめて、人間のことをホモ・サピエンスと言います。「知性ある生き物」ということです。言葉を語ったり、道具をつくったり、人と人とのつながり、社会を形成する。そうしたことはすべて知性から出発している。人間は最も端的に表現すればホモ・サピエンスということでしょう。

皆さん、ちょっと天井を見てください。はい、どうもありがとうございます。今、天井を見てくださいとお願いしましたら、皆さんは顔を上げてくださいました。天井を見る。真っ直ぐ真上を見るのは他の動物はできない。人間が直立二足歩行、二本の足で立ち上がり、歩くようになった。大地の上に二本の足でしっかりと立ち、そして真っ直ぐに真上を見ることができ。これは竹内敏晴先生が「ことばが劈(ひら)かれるとき」という本の中で教えて下さいました。人間は空をおおぐことができる。いつの頃からか、我々のはるか遠い祖先が四足の状態から訣別して二本の足で立つ。両手を自由に使うことができる。そして立ち上がって真っ直ぐ上を見たり、ま後ろを見ることができるところになった。動物は目の前の視野しか見ることができないでしょう。私も人

空をあおぐ人

間は二本の足で立ち上がることによって、ぐるりと三百六十度見えるようになった。またはるか大空の宇宙の果てまで我々は心を寄せることができました。今まで見えていなかったものが見える。知らなかったものを知る。直接目に見えなくても、触れることができなくても、宇宙にまで広がる心の中で、さまざまなことがらを想像できる。ホモ・サピエンスです。知性が発達したんです。すばらしいことです。竹内先生の言葉によって、もう一度、人間の徳というものを定義すると、「人間とは空をあおぐことができる」と言うことができます。

ところが、ここに一つの大きな問題が起こってきました。二本の足で立ち上がることによって全世界が自分の目や感覚、心の中に受け止められる。すばらしいことです。が、それまで地面のすぐ近くにあつた頭がだんだん上がってきて、やがて立ち上がって直立歩行をするようになった。そこに「意識の優位性」が確立しました。問題はその意識にあります。意識の優位性は知性の驚異的発達を促すと同時に、それこそ時代劇で言うように頭(ず)が高くなったんです。つまり他のものを見下ろすような意識でもあります。いつのまにか、私の存在そのものの根っこを見失ってしまった。はる

かかなたまで続いているこの大地の上に、どこまでも広がっている大空の下に、今私はいるんだなということを忘れてしまった。狭い視野の中で他のものを見下ろして、「あいつよりも私の方が勝れている」「あの人にくらべて私はなんでこんなにみじめなのか」と明け暮れ思っている。他と比較し、自分が勝っていると思えば優越感に浸り、他から見下ろされていると感じては劣等感を覚える。そういう大変な問題が起って来ました。

仏教はそうした自と他を対象化し、見下ろす意識を「分別心」と言います。分け隔てる心です。他の人よりも優れていようと、劣っていようと、高かろうと低かろうと、どんな人も広い大地の上に立っており、どんな人も壮大な天のもとにある。仏教は私どもの分別に囚われている心をもう一度解き放し、広い天地がある、皆、大地の上に立って、空をおおいでいることを教えています。私の先生である信國淳先生は、「広若虚空、温如大地（広きこと虚空のごとし、温かきこと大地のごとし）」と教えて下さいました。仏教は広大な天地の間に我々が命を享けていることを教えています。

そうした大空をおおぎ、大地に立つ心を詠んだ詩をご紹介します。終わりたいと思いま

空をあおぐ人

す。星野富弘さんの「たんぼぼ」という詩です。

いつだったか

君たちが 空をとんで行くのを 見たよ

風に吹かれて

ただ一つのものを持って

旅する姿が

うれしくてならなかったよ

人間だって どうしても必要なものは

ただ一つ

私も 余分なものを 捨てれば

空が とべるような 気がしたよ

ご静聴ありがとうございました。

—二〇〇二年一月二五日—